

我が署における人材育成活動

網走西部森林管理署西紋別支署

国沢 修

貞廣 久男

1 課題と取り上げた背景

当支署の職員年齢構成は34才以下の職員が11名で、定員内職員の48%を占めています。さらに当支署は数年前に現場作業班が無くなっており、現場経験の少ない職員に対し、いかにベテラン職員が技術の継承を行うというかが大きな課題となっております。

そこで、若手職員のOJT実施計画とは別に若手職員に限らず全職員が知識・技術の向上を目指すことを目的に今年度より、支署内の勉強会を人材育成の一環として実施しました。

また「勉強会という形態で」基幹作業職員を含めたベテラン職員の技術を継承することに取り組んでみました。

2 取組みの経過および実行結果

現場経験の少ない職員が請負監督・検査業務で苦勞している実態があることから、収穫調査と生産事業を主に取組むこととし月1回実施の計画でスタートしました。

これまで開催した勉強会の状況は表2のとおりです。

表2

平成22年度 支署内勉強会の内容

回	テーマ	実施日	講師	趣旨	内容	参加者
1	「低コスト高効率作業システム」 ＜産学＞	5月13日	支署長	森林・林業再生プランに基づいた、壊れにくい作業路と高性能林業機械を使った依採抽出作業について理解する	北海道森林管理局の素材生産における低コスト高効率作業システムの今後の取り組みについて説明し、特に、壊れにくい耐久性のある路網の作設と、高性能機械の種類やその性能を説明	17
2	「低コスト高効率作業システム」 ＜現地＞	5月24日	支署長		低コスト高効率作業システム導入現場にて、表土ブロック積み工法による集材路作設とハーベスター・フォワードによる単幹集材を学んだ	23
3	収穫調査 ＜産学＞ 治山工事 ＜現地＞	6月16日	技術専門官 治山係長・係員	収穫調査は委託調査が主になり、直接関われなくなっている中で、森林経営の始まりとしての認識を深めるため森林管理署としては珍しい海岸工事が当支署で行われていることから、その工事内容について勉強する機会を設けた	収穫調査の基本的な考え方と実務を中心に実務的内容を講義・海岸保安材の護岸工事現場にて、工事の経緯と特に初めて行われているカラマツ材を活用した、基礎地盤改良工について学んだ	24
4	地状況調査 ＜現地＞	7月12日	業務課長 経営係長 育成係長	従来は少なかった主伐期を控えた造林地の見方・考え方とその判断のポイントを知る。また、森林吸収源対策の対象箇所判断の相互理解	2回目間伐を終えている林分を主伐期との残存率を考慮しての施業の判断や吸収源対策未施業箇所にて一小班だけでなく隣接小班も含めた広範囲での施業の判断等を説明	15
5	収穫調査 ＜現地＞	10月5日	業務課長 総務課長	「収穫調査」を自ら行い体感し理解深める	指導者を複数配置し、マンツーマンで安全作業も含め具体的な作業内容とポイントを個別に指導	11
6	収穫調査 ＜現地＞	10月19日	支署長 技術専門官	回面と現地を照合する技術を身につける	回面と現在位置を判断するための様々な材料を現地で具体的に指導する	7
7	樹種名勉強 ＜現地＞	12月9日	支署長 総務課長 技術専門官	落葉時期での樹木名の判断をより正確に行う	落葉し枝と幹・樹皮から樹種名を判断する技術を学ぶ。また、名前の由来や特徴を強調し理解を深める	8
8	銘木と有利採材 ＜現地＞	12月10日	支署長 技術専門官	近年 希な大径材の処理を学んだ	採材現場にて、大径材の長材を見ながら、有利採材による玉切りと長径を決定するまでの過程を学んだ	13
今後	木材の川上から川下へ、加工と流通	未定	支署長 業務課長	単に立木販売や素材販売を行うだけでなく、販売後の加工・流通までの過程を学ぶ	一般製材・集成材・合板等各種用途毎の工場視察を行う	

(1) 勉強会 1回目、2回目

森林・林業再生プランに基づいた、壊れにくい作業路と高性能林業機械を使った伐採搬出作業について理解してもらうため、生産事業での「低コスト・高効率作業システム」について支署長が講師となり支署内の希望者を対象に座学と現地実習の2回にわたり実施しました。

今年度より当システムについては新たに導入されることに加え、北見事務所管内の現地検討会が当支署部内で開催されることになりました。

この検討会は民有林関係者を含めて130人規模になることから、勉強会は準備をはじめ、当該支署職員としての意識・知識の向上を図る良い機会となりました。

また、検討会の実施事業体のデモンストレーションを兼ねて実施しました。

5月13日は17名が参加し、支署長が講師となって座学を実施し、作業システムの概要を学びました。

5月24日は23名が現地において「低コスト・高効率作業システム」の「表土ブロック積み工法」による集材路作設や、ハーベスター・フォワダーによる単幹集材等を学びました。



(2) 勉強会3回目

6月16日に収穫調査業務が外部委託調査が主となり、職員が直接関われなくなっている現状があり、森林経営の始めの業務としての収穫調査の意義を再認識し、基本と実務を経験談等を交えながら実践的な内容で学びました。

また午後からは24名が参加し治山工事現場で森林管理署としては珍しい海岸工事が当支署で行われていることから、その工事内容について勉強する機会を設けました。

また、今年度より治山係に配置となった若手係員に説明役を担わせるなどして、人材育成を少しでもと、工夫しました。

工事の経緯と、特に初めて行われているカラマツ材を活用した、基礎地盤改良工について学び、質問も多く有意義な勉強会でした。



(3) 勉強会4回目 (7月12日15名参加)

主伐期を控えた人工林の次期施業の判断に現場職員が苦慮していたことから、判断のポイントを現地実習で学びました。

森林吸収源対策の対象箇所の判断と日頃の疑問などの相互理解を図りました。結果は、対象地の見方と考え方の流れはある程度理解されましたが、やはり、実際の判断には個別事案がそれぞれあり、画一的には判断しがたく、今後も経験を積む手助けが必要です。



(4) 勉強会5回目、6回目 (10月5日11名、10月19日7名参加)

今まで収穫調査の未経験者を対象に収穫調査の現地実習を行いました。伐区踏査・周囲測量・標準地調査、列状間伐調査の一連の作業を実体験しました。最終的には復命書作成・立木予定価格評定まで一連で行いたいと考えていましたが、実際はうまくいかず欲張りすぎた感があったと反省しています。焦らず来年以降継続した取組む予定です。



(5) 勉強会7回目 (12月9日8名参加)

若手からの要望もあり広葉樹の落葉期の樹種名を正しく判別できるよう枝・幹・樹皮から判断する技術を身につける目的で行いました、元収穫調査経験者の基幹作業職員に標本の準備や指導してもらったり、北海道林業技士会作成の資料等を活用し、名前の由来や個々の特徴を強調し、興味を持って覚えられる工夫をしました。

今回採取した標本を整備して、署内のロビー等に展示して、いつでも復習が出来るようにしたいと考えています。

午後は、現地においてグループ分けし樹種を見分け、答え合わせするなどゲーム感覚で、樹種当て方式により勉強会を実施しました。

同じ木が別々に木肌に見えたり、違う木が同じに見えたりもしましたが、徐々に(樹種を)見分ける目がついてきました。

(後日、参加者からの要望があり、夏山でも再度実施する予定です。)



(6) 勉強会8回目（12月10日13名参加）

請負生産事業から生産された優良材の、採材の仕方について里土場にて学びました。

最近ではあまり見られない近年希な広葉樹の長大径材の有利採材について、欠点を判断しながらより有利に販売できる長径を決定する技術や、数字極印・S管打ちの体験をしました。

特に今回銘木市に出品する素材はここ近年にないほどの珍しい品であり貴重な勉強会でもありました。



以上がこれまで実施した内容です。

3 今後の取組み

今年度この後の勉強会は、単に立木販売や素材販売を行うだけでなく販売後の加工・流通までの過程を学ぶことを目的に、一般製材・集成材・合板等、各種用途毎の工場視察を今年度残り期間において実施します。

当支署から出された材が、どのように製品化されていくか、川上から川下への流れを勉強したいと考えています。

4 考察

本取組みにおいて今年度は広く浅くといった内容での実施でありましたが、特に若手職員が色々な事項に対し少しは興味を抱く動機付けになったのではないかと感じています。

来年度は今回の反省を踏まえつつ、少しずつ中身の濃い内容となるよう実施して行きたいと考えています。

また、ベテラン職員が講師役となり勉強会を行うことにより、若手職員とのコミュニケーションが深まり、支署内の和にもつながったのではないかと感じています。

来年度は是非地域の中で一体的な森林環境教育活動等も行いたいと考えており、そのための企画や事前学習・準備を地元の方々と一緒に取組みたいと考えています。

そのような取組みが職員一人一人の技術の向上につながり、地域における支署（国有林）の存在意義を深めることの原動力となることも目指し、今後も引き続き、継続した取組みとしていきたいと思えます。

まとめ

- 若手職員の動機付け
- ベテラン職員の講師役



コミュニケーションの深まり



地域とのつながり、取組み



職員の技術の向上と、地域における国有林の存在意義を深める原動力となることも目指す

